

Person-centred Care の理論の現状と看護研究としての展望

筆者は、本誌 39 巻 4 号(2006 年)の特集「認知症高齢者の尊厳を維持する看護研究」において、「Person-centred Care と認知症ケアマッピングを用いた研究の動向と看護研究の課題」を執筆した。その後、7 年が経過し、わが国でも Person-centred Care は、さらに注目されるようになってきた。しかし、単なる「個別ケア」等と同様の意味で使用されたり、さまざまにケアの理念などとしても用いられている。そうした「Person-centred Care」が認知症高齢者の現実のケアからかけ離れ、特に看護において、「Person-centred Care」の本来の意味が十分に周知されず、正しく理解されていないのではないかという懸念を、筆者は感じてきた。そのことが、本特集を企画した契機である。

Person-centred Care は、英国の老年心理学者 Tom Kitwood が最初に提唱した、認知症の人々の立場に立つ視点を重視する認知症ケアの理念である。現在、世界中に普及しており、英国やオーストラリア、スウェーデンにおいては、政府のケアガイドラインなどにもこの理念が記されている。また看護理論においては、Abdellah が提唱した「患者中心の看護」は Person-centred Care と共通する部分がある。しかしこれは、看護師-患者関係があくまでも患者役割を担う個人と看護師という枠組みの中にとどまっている。本来の Person-centred Care では、ケアを提供する人とケアを受ける人の枠を超え、人々に寄り添い信頼し合う相互関係の中から人を尊敬し、その人のニーズに注意深く対応して、その人の能力を発揮できるよう支援することを重視する。認知症の人々の「パーソン」の部分、つまりその人そのものの個人の価値(尊厳)や生きる意味の価値を尊重し、ともに寄り添い合う人間関係が、認知症の人の抱える多くの課題やニーズを解決するという立場をとる。超高齢化社会のわが国における認知症高齢者のさまざまな課題も、看護師が認知症の人に求めるニーズにいかにかに真摯に向き合うことができるかにかかっているといえよう。

本特集で取り上げる認知症ケアマッピング(DCM)は、Person-centred Care を実

現するための評価システムである。Kitwood は DCM を、「認知症の人の内面をわかろうとする気持ちと観察の技能とを用いて、認知症の人の立場に立とうという真摯な取り組みである」と述べている(水野訳, 2008)。6 時間の観察を繰り返すことで、認知症高齢者の気持ちを疑似的に体験できるツールである。自らを語ることが困難な認知症高齢者が、いまどのような気持ちでケアを受けているのか、毎日を過ごしているのか。そうした認知症高齢者の気持ちを、できる限りその人に立場に立って理解しようとする取り組みとして、非常にすぐれたツールといえる。特に DCM 第 8 版では、認知症ケアの意義がより明確化し、一層実践で役立つものとして進化している。しかもこのツールの活用においては、認知症高齢者のみならずケアスタッフが専門職として成長できるプロセスを有しており、ともに発展的な展開が期待できる。現在、介護施設だけではなく急性期病院でも導入が試みられており、Person-centred Care と DCM が、認知症ケアに新たな変革を引き起こすのではないかと筆者は予測している。本特集でも、DCM が施設のスタッフに大きな影響を及ぼしていることを見て取っていただけることと思う。

Person-centred Care の理念を初めて学んだとき、自分のいままでの実践がどれだけ間違っていたのかと、強い衝撃を受けたことがいまでも忘れられない。Person-centred Care を実現することは難しいといわれる。確かに難しい。しかし、それを実現しようと熱心に取り組んでいる実践家は数多い。WHO などでも、医療に Person-centred Care の概念を導入しようする動きがあり、それは認知症ケアにとどまらず、急性期や慢性期、緩和医療、また在宅医療の領域にも広がりを見せている。本特集では、Person-centred Care の概要と理論、DCM の実践研究などを通じて、これからの展望を明らかにしていきたい。

●水野裕(2008). Dementia Care Mapping の臨床的有用性と今後の課題. 老年精神医学雑誌, 19 (6), 657-663.

企画：鈴木みずえ(浜松医科大学医学部看護学科教授)